フランス語とコルシカ語における条件法の対照研究

渡邊 淳也

1. はじめに [1]

本研究の目的は、フランス語とコルシカ語の条件法現在形ならびに条件法過去形を対照し、相違を明らかにすることである。具体的には、つぎのような形式が中心的対象となる。例示はフランス語 chanter、コルシカ語 cantà (いずれも「うたう」) による。フランス語では主語人称代名詞が接語 (clitique) なので、以下では主語人称代名詞をそえて活用形を示している。

・フランス語の条件法現在形：je chanterais, tu chanterais, il chanterait, nous chanterions, vous chanteriez, ils chanteraient

・フランス語の条件法過去形 (完了助動詞の条件法現在形＋過去分詞)：j'aurais chanté, tu aurais chanté, il aurait chanté, nous aurions chanté, vous auriez chanté, ils auraient chanté

・コルシカ語の条件法現在形第 1 形 : canteria, canterii, canteria, canteriamu, canteriate, canterianu (ただし方言的ヴァリアントもあり、それらも本研究の対象としている)

・コルシカ語の条件法現在形第 2 形：canterebbi, canteresti, canterebbe, canterebbemu, cantereste, canterebbenu (ただし方言的ヴァリアントもあり、それらも本研究の対象としている)

・コルシカ語の条件法過去形第 1 形 (完了助動詞の条件法現在形第 1 形＋過去分詞)：averia cantatu, averii cantatu, averia cantatu, averiamu cantatu, averiate cantatu, averianu cantatu (方言的ヴァリアントもあり、それらも本研究の対象としている)

・コルシカ語の条件法過去形第 2 形 (完了助動詞の条件法現在形第 2 形＋過去分詞)：averebbi cantatu, averesti cantatu, averebbe cantatu, averebbemu cantatu, avereste cantatu, averebbenu cantatu, (方言的ヴァリアントもあり、それらも本研究の対象としている)

これ以外の形式については、フランス語、コルシカ語のいずれか一方で条件法を用いているとき、他方の言語の対応部分に生起する叙法・時制のみを考察の対象とする。

フランス語の条件法現在形、ならびにコルシカ語の条件法現在形第 1 形は後期ラテン語 cantare habebam (動詞不定法＋助動詞 habere の半過去形) に由来するのに対し、コルシカ語の条件法現在形第 2 形は後期ラテン語 cantare habui (動詞不定法＋助動詞 habere の単純過去形) に由来するというちがいがある。コルシカ島北部の大部分では両者を用いているが、それ以外では第 1 形のみを用いている (Casta 2003, p.77)。単純時制としての条件法現在形を助動詞として用いる複合時制としての条件法過去形についても事情は同様である。

先行研究、たとえば Gaggioli (2012, p.109) は、コルシカ語とフランス語の条件法の用法は、多くの場合類似している (« La plupart du temps, l'emploi du conditionnel est similaire en corse et en

[1] 本稿は、科学研究費 (JSPS Kakenhi) 基盤研究 (B) JP-18H00667 (研究代表者：山村ひろみ)、同 (C) JP-22K00615 (研究代表者：和田尚明)、ならびに同 (C) JP-20K00565 (研究代表者：渡邊淳也) の助成をうけて遂行された研究の成果の一部である。

français ») と指摘しているが、あとでみるように、両言語の条件法には実態としてはさまざまな相違がある。

以下の論述は、つぎに示すような手順によってなされる。まず 2 節で、コーパス調査の結果を報告する。3 節ではフランス語またはコルシカ語で条件法現在形が用いられている事例について、4 節ではフランス語またはコルシカ語で条件法過去形が用いられている事例について、注目にあたいする代表的な用法の例文を観察するとともに、分析を行なう。

2. コーパス調査

Prosper Mérimée の小説 *Colomba* のフランス語 (＝原作)・コルシカ語対訳版 (Ghjuvan Battistu Paoli 訳、CANOPÉ [＝Réseau de création et d'accompagnement pédagogiques] 2016 年刊行、各言語とも約 47,000 語) をコーパスとして用いて、ふたつの言語のうち少なくとも一方で条件法を用いている文、ならびにそれらの文の他方の言語での対訳をすべて収集した。その結果はつぎの表 1 のとおりであった。収集した例数としては 272 例×2 言語で 544 例ある。

表 1：フランス語・コルシカ語における条件法と対応する叙法・時制 [2]

フランス語	コルシカ語	生起数
条件法現在形	条件法現在形第1形	125
条件法過去形	条件法過去形第1形	33
条件法現在形	直説法現在形	19
条件法現在形	直説法単純未来形	11
対応個所なし	条件法現在形第1形	9
直説法現在形	条件法現在形第1形	8
条件法現在形	直説法半過去形	8
条件法現在形	条件法現在形第2形	7
接続法大過去形	条件法過去形第1形	7
条件法現在形	対応個所なし	7
条件法現在形	迂言的未来形	6
直説法単純未来形	条件法現在形第1形	5
直説法半過去形	条件法現在形第1形	5
条件法現在形	条件法現在形×迂言的未来形	4
条件法現在形	直説法半過去形×迂言的未来形	4
条件法現在形	接続法半過去形	3

[2]「対応個所なし」と分類したのは、(i) 定形動詞が使われていない場合、(ii) 文構造がまったくことなる訳である場合、(iii) 訳文が抜けている場合、(iv) フランス語・コルシカ語以外の言語が用いられている場合、の 4 つである。

条件法過去形	直説法半過去形	2
条件法過去形	直説法大過去形	2
条件法現在形	命令法	1
条件法過去形	条件法現在形第1形	1
条件法過去形	接続法半過去形	1
条件法過去形	直説法単純未来形	1
条件法過去形	直説法半過去形×迂言的未来形	1
直説法半過去形	条件法過去形第1形	1
接続法半過去形	条件法現在形第1形	1
合　　計		272

つぎに、表 1 を母数として再集計し、フランス語で条件法を用いている例、コルシカ語で条件法を用いている例のそれぞれからみた場合、対訳言語でどのような形式を用いているかを示すと、それぞれ表 2、3 のようになる。

表 2：フランス語の条件法からみた集計

フランス語	コルシカ語	生起数
条件法現在形	条件法現在形第 1 形	125
	直説法現在形	19
	直説法単純未来形	11
	直説法半過去形	8
	条件法現在形第 2 形	7
	対応個所なし	7
	迂言的未来形	6
	条件法過去形第 1 形	4
	条件法現在形第 1 形×迂言的未来形	4
	直説法半過去形×迂言的未来形	4
	接続法半過去形	3
	命令法	1
条件法過去形	条件法過去形第 1 形	33
	直説法半過去形	2
	直説法大過去形	2
	条件法現在形第 1 形	1
	接続法半過去形	1
	直説法単純未来形	1

	直説法半過去形×迂言的未来形	1
合　　計		240

表 3：コルシカ語の条件法からみた集計

コルシカ語	フランス語	生起数
条件法現在形第 1 形	条件法現在形	125
	対応個所なし	9
	直説法現在形	8
	直説法単純未来形	5
	直説法半過去形	5
	条件法過去形	1
	接続法半過去形	1
条件法過去形第 1 形	条件法過去形	32
	接続法大過去形	7
	条件法現在形	4
	直説法半過去形	1
条件法現在形第 2 形	条件法現在形	7
条件法現在形第 1 形×迂言的未来形	条件法現在形	4
合　　計		210

個々の例文の検討は次節以降におこなうこととして、ここでは統計上目立った点を指摘しておきたい。まず、表 2 と表 3 の総数をくらべると、フランス語で条件法を 240 例用いているのに対して、コルシカ語では 210 例と少なくなっており、総じてフランス語のほうがコルシカ語より条件法を多く用いる言語であることがわかる。つまり、フランス語で条件法を用いているところに対応するコルシカ語の叙法・時制のほうが多様であるということである。

また、本稿の調査の範囲内では、フランス語の条件法からのコルシカ語訳には、迂言的未来形 (avè da + 不定法) が合計 14 例あらわれるのに対し、コルシカ語で条件法を用いている個所に対応するフランス語には、迂言的未来形 (aller + 不定法) は皆無であるという非対称性が注目にあたいする。なお、表 1、表 2 のコルシカ語のがわで用いている「〇〇形×迂言的未来形」という表記は、迂言的未来形の助動詞 avè を「〇〇形」に活用させた形をさしている。フランス語の迂言的未来形では、助動詞 aller を直説法現在形、半過去形にしか活用できないのに対して、コルシカ語では助動詞を多様な叙法・時制におくことができるので、この点も迂言的未来形の使用の広さにつながっているものと思われる [3]。

[3] フランス語および西ロマンス諸語の迂言的未来形については、渡邊 (2014) (2017 b) を参照。また、フランス語、コルシカ語、ロマンス諸語の未来諸時制の対照研究については、さらに渡邊・小川 (2018)、渡邊

3. 条件法現在形を中心とする対照分析

本節ではフランス語またはコルシカ語で条件法現在形が用いられている事例について、注目にあたいする代表的な用法の例文を観察するとともに、分析を行なう。また、前節では統計化の対象とはしなかったが、対比のため、*Colomba* のイタリア語訳書 (Ottone Bacaredda 訳、Head & Line 2014 年刊行) も引用する。ただしあくまでも参考のためであり、イタリア語の条件法については論じない。以下、例文を提示する際には、フランス語を仏、コルシカ語を科、イタリア語を伊と略する。

3.1. 両言語とも条件法現在形を用いる場合

統計的にはこの事例がもっとも多い。該当する用法は以下にあげるようなものである。

3.1.1. まず、過去からみた未来を標示する、条件法現在形のいわゆる時制的用法。(1) の例においては、条件法現在形は時制の照応によって従属節に生起している。このような場合は、フランス語とコルシカ語でよく一致して条件法現在形を用いている。

(1) 仏 En outre, d'après les volontés de sa fille, le colonel stipula que le capitaine ne **prendrait** [条現] [4] aucun passager, et qu'il **s'arrangerait** [条現] pour raser les côtes de l'île de façon qu'on pût jouir de la vue des montagnes. (対訳書 p.16)

科 In soprappiù, è sicondu u vulè di a figliola, u culinellu fece patti è cundizione ch'ellu ùn **pigliaria** [条現 1] nisun'altru passageru u capitanu è ch'ellu **circaria** [条現 1] di custighjà di modu ch'elli pudissinu gode a vista di e muntagne di l'isula. (対訳書 p.17)

伊 Inoltre, dietro la volontà di sua figlia, il colonnello stipulò che il capitano non **prenderebbe** [条現] altri viaggiatori e che si **ingegnerebbe** [条現] a rasentar le coste dell'isola in modo di lasciare godere la vista delle montagne. (伊訳書 p.23)

そのうえ、娘の意思にそって、大佐は船長にほかの客をまったく乗せないことと、山の景色をよく眺められるよう、海岸線に沿って行くことを約束させた。

3.1.2. つぎに、要求・願望などの語調を緩和する用法の条件法現在形。

(2) 仏 Je **voudrais** [条現], poursuivit Orso, vous voir quitter ce pays… et mener une vie plus tranquille.

(2019 a) (近刊) を参照。

[4] 例文中で用いた記号はつぎのとおり。[条現] 条件法現在形、[条現 1] 条件法現在形第 1 形 (コルシカ語のみ)、[条現 2] 条件法現在形第 2 形 (コルシカ語のみ)、[条過] 条件法過去形、[条過 1] 条件法過去形第 1 形 (コルシカ語のみ)、[直現] 直説法現在形、[単未] 直説法単純未来形、[迂未] 迂言的未来形、[条現 1×迂未] 助動詞を条件法現在形第 1 形においた迂言的未来形 (コルシカ語のみ)、[半過×迂未] 助動詞を直説法半過去形においた迂言的未来形 (コルシカ語のみ)、[単過] 直説法単純過去形 (イタリア語文法では遠過去形 passato remoto というが、用語を統一した)、[半過] 直説法半過去形、[大過] 直説法大過去形、[接大過] 接続法大過去形、[不] 不定法。

(対訳書 p.336)

科 **Vurria** [条現 1] eiu, cuntinuò Orsu, ch'è vo lascessiti issu paese... par fà una vita più tranquilla.

(対訳書 p.337)

伊 Io **vorrei** [条現] , — proseguiva Orso — vedervi lasciare questi paesi e menare una vita più tranquilla. (伊訳書 p.189)

あなた方はこの国を出て、とオルスがつづけた、もっと静かに生活してほしいものです。

(2) ではフランス語版、コルシカ語版ともに、対話者に関する話者の願望をのべる際の≪語調緩和≫のために条件法現在形が用いられている。このような場合も、フランス語とコルシカ語でよく一致して条件法現在形を用いている。

つぎの例にはフランス語版、コルシカ語版とも、ふたつの条件法現在形の生起がみられる。

(3) 仏 Mais je **voudrais** [条現] bien savoir ce que cet Anglais **pourrait** [条現] objecter contre notre alliance. (対訳書 p.124)

科 Ma **vurria** [条現 1] po sapè parchè ch'ellu ùn **accunsintaria** [条現 1] ad imparintà si cù noscu quell'Inglese. (対訳書 p.124)

伊 Ma io **vorrei** [条現] un po' conoscere che **potrebbe** [条現] obiettare quella giovane inglese contro la nostra alleanza. (伊訳書 p.80)

でもわたしがたずねたいのは、あのイギリス人がわたしたちの縁談になんと言って反対できるのかということです。

条件法現在形のひとつめの生起は (2) と同様の語調緩和用法であるが、ふたつめの生起については、解釈がもう少し複雑になる。(3) は間接疑問文であるため、従属節での条件法現在形の使用は時制の照応によるものであると解することもできる。しかし、この間接疑問の結果的な解釈は、「あのイギリス人はわたしたちの縁談に反対できるはずがない」という否定を推論させる修辞疑問であるので、条件法はここでは、その推論のたすけになるよう [5]、断定の直截性を相対化させる機能を果たしていると考えられる。これもまた、ひろい意味では≪語調緩和≫といえるかもしれないが、真偽判断にいっそう強くかかわるという点で、儀礼的な≪語調緩和≫とはことなる。しかし、そのような相違があるとはいえ共通していることは、条件法が≪他者の言説≫を喚起する機能があるということである [6]。条件法は、(3) でのふたつめの生起や、つぎの (4)、(5) のように、疑問と共起することが多いが、それはまさに、他者に真偽判断をゆだねる疑問の機能が、≪他者の言説≫を喚起する条件法の機能と協調するからである。≪他者の言説≫を喚起する機能

[5] Diller (1977) や Confais (1990) が、条件法には語用論的な推論を促進する機能があるという仮説をたてていることを想起すると、ここでの議論は理解しやすいかもしれない。

[6] ひろい意味での≪他者の言説≫を鍵とする仮説によって条件法を理解するこころみについては、さらに Watanabe (2002)、渡邊 (2004) (2014) (2018) (2019 a) (2019 b) を参照。

は、(4) のフランス語版・コルシカ語版、(5) のコルシカ語版のように、フランス語なら et、コルシカ語なら è ではじまっている文が多いことからも察せられる。これらの等位接続詞は、対話者の「ことばを継ぐ」という意識から用いられているものであり、ここでは対話者の発言が≪他者の言説≫に相当する。先立つ対話者のせりふもわかるように、(4)、(5) は前文脈を長めに引用しておいた。

(4) 仏 — Est-ce l'usage ici, dit Miss Nevil en souriant, que les demoiselles portent ce petit instrument dans leur corset ?

— Il le faut bien, répondit Colomba en soupirant. Il y a tant de méchantes gens !

—Et **auriez** [条現] -vous vraiment le courage d'en donner un coup comme cela ? (対訳書 p.80)

科 — Soch'ellu hè l'usu ind'è voi, disse Miss Nevil surridendu, chì e damicelle si purtassinu st'incrochju in lu so imbustu ?

— Ci vole, ci vole, rispose Culomba suspirendu. Ci hè tanta gattiva ghjente !

— È l'**avariate** [条現 1] da veru u curagiu di minà cusì ? (対訳書 p.81)

伊 — Si costuma forse qui — disse miss Nevil sorridendo — che le damigelle portino questo piccolo strumento nella loro fascetta ?

— Di necessità ! — rispose Colomba sospirando — Vi hanno tanti di quei cattivi soggetti !

— E vi **basterebbe** [条現] davvero il coraggio di dare un colpo di quest'arnese ? (伊訳書 p.56)

「お嬢さんたちが、コルセットのなかにこんな短刀を隠しもっているのがここでの習慣なのですか？」とネヴィル嬢がほほえみながら言った。

「そうしないといけないのです」とコロンバはため息をつきながら言った。「悪いやつが多くいますから」

「それで、本当にこんなふうに刃物でひと突きする勇気がおありですか？」

(5) 仏 — Jolie comme tu es, Colomba, je m'étonne que tu ne sois pas déjà mariée. Allons, tu me diras qui te fait la cour. D'ailleurs j'entendrai bien les sérénades. Il faut qu'elles soient belles pour plaire à une grande vocératrice comme toi.

— Qui **voudrait** [条現] d'une pauvre orpheline ? (対訳書 p.152)

科 — Bella cum'è tù sè, o Culomba, mi maravigliu ch'è tù ùn sii aghjà maritata. Aiò, mi diciarè quale ti face l'amore ? D'altronde mi camparia à sente sirinati. Ci vurrà po ch'elli fussini belli par piace à una vuciaratrice di trinca cum'è tè.

— È quale hè chì ne **vurria** [条現 1] d'una corcia urfanella ? (対訳書 p.153)

伊 — Bella come tu sei, o Colomba, io mi meraviglio che sii ancora zitella. Ebbene, tu mi dirai chi ti fa la corte. O almeno io baderò un po' alle serenate. Bisogna che esse siano belle davvero per incontrare il genio di una *voceratrice* tua pari !

— Che **vorresti** [条現] da una povera orfana ? (伊訳書 p.95)

「コロンバ、きみはきれいだから、まだ結婚していないのはふしぎだよ。さあ、だれがきみに交際

を申し込んでいるのか言いなさい。すくなくとも、セレナータはあきるほどきいたことだろうよ。きみのようなヴォヂェラトリーヂェ[7]に気に入られるには、セレナータは本当に立派でないといけないな」

「あわれな孤児をだれが狙うというのですか？」

≪他者の言説≫を喚起する機能については、フランス語とコルシカ語の条件法におおむね共通しているものの、使用の実情としては、フランス語のほうがその機能をいっそうさかんに活用しているようである。そのことについては 3.2 節で確認する。

3.1.3. そして、現在の事実に反する仮定にもとづく帰結節にあらわれる条件法現在形。

(6) 仏 Si j'étais à votre place, Orso, je n'**hésiterais** [条現] pas, je **demanderais** [条現] miss Nevil à son père… (対訳書 p.124)

科 S'e[8] fussi in voi, o Orsu, ùn **dubbitaria** [条現 1] micca è à Miss Nevil a **dumandaria** [条現 1] à u babbu... (対訳書 p.125)

伊 Se io fossi a vostro posto, Orso, io non **esiterei** [条現] punto, a **chiedere** [不] miss Navil a suo padre. (伊訳書 p.79)

もしわたしがあなたの立場なら、オルソ、ためらわずに、「ミス・ネヴィルと結婚させてください」と彼女のお父さんに言いますよ。

ただし、あとでみるように、コルシカ語では条件文の文型がフランス語ほど顕著に固定されてはいないため、フランス語で条件法を用いているのに対してコルシカ語ではちがった形式を用いている例もある。

3.1.4. ここで、コルシカ語の条件法第 2 形についてふれておきたい。コーパスのコルシカ語版では、条件法の生起は全島的に使われている第 1 形が圧倒的であり、第 2 形は条件法現在形のみで、7 例しかなかった。この 7 例はいずれもフランス語版の条件法現在形からの対訳であり、いずれも知事のせりふのなかに生起している。この限定的な生起は、第 2 形がコルシカ島北部にしかみられないことからくると思われるが、原作には、知事がコルシカ島北方方言の話者であると確定できる証拠は見あたらない。翻訳の際、解釈としてそのようにしているのであろう。用法としては、語調緩和用法が 5 例、条件文が 2 例であった。下記にひとつ例文をあげておく。

(7) 仏 Or, Tomaso a cru que, si M. Barricini obtenait le cours d'eau, il **aurait** [条現] un loyer considérable

[7] ヴォーヂェル (voceru ; コルシカの挽歌) をうたう女性。

[8] S'e は、仮定節をみちびく接続詞 se のあとに、主語人称代名詞 eiu「わたしは」の短縮形がつながったものである。註 12 でふれる s'è とはことなる。

à lui payer, car on sait que M. Barricini aime assez l'argent. (対訳書 p.198)

科 Or casca chì Tumasgiu hà credutu, in casu ch'ellu tucchessi à u sgiò Barricini u fiume, ch'ellu ne **dumanderebbe** [条現 1] tamantu affittu, chì si sà quant'ellu hè suldaghju u sgiò Barricini.

(対訳書 p.199)

伊 Ora Tomaso credette che se Barricini ottenesse il corso d'acqua, ne **avrebbe preteso** [条過] un fitto assai rilevante, giacché non ignorate che l'avvocato Barericini ha molta passione pel dinaro.

(伊訳書 p.120)

そして、もしバリヂーニ氏が水流の権利を得るなら、トゥマーヂュはかなりの賃借料をはらうことになるだろう、とトゥマーヂュは思ったのです。というのも、知られているように、バリヂーニ氏はたいそうお金に執着するほうだから。

3.2. フランス語のみで条件法現在形を用いる場合

つぎに、フランス語のみで条件法現在形を用いる場合の典型的事例を検討してゆこう。

3.2.1. まず、フランス語の条件法現在形にコルシカ語の直説法現在形が対応する場合である。この対応関係は 19 例あり、コルシカ語でいずれかの条件法現在形を用いているのに対してフランス語で直説法現在形を用いている 7 例より多い。フランス語のほうが条件法現在形をひろく用いていることが察せられる。

(8) 仏 Me **croiriez** [条現]-vous donc capable de devenir jamais un assassin ? (対訳書 p.62)

科 Soca mi **cridite** [直現] capace di divintà mai un assassinu ? (対訳書 p.63)

伊 Mi **credereste** [条現] dunque capace di diventare un assassino ? (伊訳書 p.47)

わたしがひとを殺せると信じておられるのですか？

(8) は疑問文であることからも、一見 (4) や (5) と類似した例であるが、コルシカ語版でだけ条件法が用いられていない。つまり、≪他者の言説≫をあらわす場合でも、コルシカ語ではフランス語ほどには好んで条件法を用いないといえる。

≪他者の言説≫をあらわす条件法のひとつの典型は、つぎの (9) のフランス語版に見られるような、いわゆる伝聞用法である。

(9) 仏 M. Barricini, continua le préfet, **désirerait** [条現] vivement voir cesser cette espèce d'inimitié…, c'est-à-dire cet état d'incertitude où vous vous trouvez l'un vis-à-vis de l'autre… (対訳書 p.196)

科 U sgiò Barricini, cuntinuò u prifettu, **brama** [直現] di fà la finita cù quella numicizia... vale à dì cù issa situazione duv'è vo state in forse unu à pettu à l'altru... (対訳書 p.197)

伊 Il signor Barricini — cuntinuò il prefetto — **desidererebbe** [条現] vivamente di por termine a questa specie d'inimicizia, vale a dire a questo stato di inquietezza nel quale vi trovate l'uno in faccia

all'altro. (伊訳書 p.118)

バリヂーニ氏は、と知事はつづけて言った。このような一種の敵対状態、つまり、あなたがたがお互いにおかれている不確かな状態を、ぜひとも終わらせたいらしいです。

ここでもまた、コルシカ語では直説法現在形が用いられており、≪他者の言説≫をあらわす際に条件法を用いるという慣習がフランス語ほど強固ではないことがわかる。

3.2.2. つぎに、フランス語の条件法現在形にコルシカ語の直説法単純未来形が対応する事例。

(10) 仏 Et si nous manquions à cette promesse, nous **devrions** [条現] sans doute nous attendre à quelque vengeance ? (対訳書 p.108)

科 È s'è no mancassimu à a nostra prumessa, ci **vurrà** [単未] ch'è no ci aspittessimu à calchì vindetta soca ? (対訳書 p.109)

伊 E se noi mancassimo a siffatta promessa, ci **dovremmo** [条現] senza dubbio aspettare qualche vendetta ? (伊訳書 p.71)

で、もしこの約束をたがえたら、おそらくなにか復讐があるということですか？

この例は 3.1.3 節で少しふれた、「フランス語では条件文の文型が顕著に固定しているため、コルシカ語より条件法の使用が多くなっている」という現象の一環であると考えられる。(9) の例はかならずしも反実仮想をあらわしているとはいえないが、フランス語では、「内容の現実性が不定である」程度でも、現在の仮想に対して (10) にみられるような＜si＋ 直説法半過去形, 条件法現在形＞の文型を用いることができる (Fauconnier 1984, p.145)。これに対し、(10) のコルシカ語版では、現実性が皆無ではない事象に対して、条件法ではなく直説法の単純未来形を用いている。

3.2.3. つぎに、フランス語の条件法現在形にコルシカ語の迂言的未来形が対応する事例。

(11) 仏 Si vous faisiez arrêter mon frère, ajouta Colomba, la moitié du village **prendrait** [条現] son parti, et nous **verrions** [条現] une belle fusillade. (対訳書 p.232)

科 S'è vo fate arristà à me fratellu, aghjunse Culomba, a mità di u paese **hà da piglià** [迂未] a so pratesa è **hà da nasce** [迂未] una fucilata di quelle. (対訳書 p.233)

伊 Se voi farete arrestare mio fratello — aggiunse Colomba — la metà del villaggio **prenderà** [単未] la sua parte e noi **verremo** [単未] una bella fucilata. (伊訳書 p.137)

「あなたがわたしの兄を逮捕させるなら、村の半分が兄の味方をするでしょう。そして、ものすごい撃ちあいを見ることになるでしょう」とコロンバはつけくわえた。

(11) のような例は比較的多く、フランス語の条件法現在形にコルシカ語の迂言的未来形が対応

する 5 例のうち 4 例までは条件文であった。条件文のなかで、フランス語は条件法を相対的に好む言語であるのに対し、コルシカ語では、なんらかの条件のもとにあることであっても、未来時に想定されるできごとであることから、迂言的未来形を用いることができる。

なお、(11) は、「そんなことをしたら、悪い結果が生じる」という≪脅し≫の言語行為を果たす発話であることが注目される。そのことは一見、「コルシカ語の迂言的未来形は時制的である」とする本稿の仮説と両立しないように見えるかもしれない。しかし、仮定さえ満たされれば自動的に帰結が出てくるかのような言いかたのほうが、仮定された行為を思いとどまらせるための≪脅し≫には効果的であり、その意味でコルシカ語の時制的な迂言的未来形は≪脅し≫に適しているのである [9, 10]。

一方、2 節でふれるところがあったように、コルシカ語の迂言的未来形では、助動詞 avè を多様な叙法・時制におくことができるので、フランス語の条件法現在形からの対訳個所でも、助動詞が直説法現在形以外におかれている事例があった。まず、助動詞が条件法現在形第 1 形におかれている例をみよう。

(12) 仏 Je vous en conjure, ne faites pas faire à Orso une action qui le **couvrirait** [条現] de honte.
(対訳書 p.202)

科 Vi ne scunghjurgu, ùn fate fà à Orsu un'azzione chì ne **avaria da avvargugnà si** [条現 1×迂未].
(対訳書 p.203)

伊 Io ve ne scongiuro, non fate commettere a Orso un'azione che lo **coprirebbe** [条現] di disonore.
(伊訳書 p.122)

お願いします、恥をかくような行為をオルスにさせないでください。

(12) のコルシカ語版については、コルシカ語の迂言的未来形の時制的な性質にかんがみると、avvargugnà si「恥をかく」という事行を未来に位置づける機能を迂言的未来形が担い、その事態へのモダリティ付与を条件法現在形が担っていると考えられる。そのモダリティはある種の≪潜在性≫であり、「恥をかくことになりうる行為」というような趣旨である。

つぎに、助動詞が直説法半過去形におかれている例。

(13) 仏 Miss Lydia lui jeta un regard plein de dignité, et, s'adressant au matelot, lui demanda quand la goélette **arriverait** [条現] au port. (対訳書 p.44)

---

[9] 実は、現代のフランス語・コルシカ語では仮定のもとでの帰結をあらわすことを主な用法のひとつとする条件法も、その起源である後期ラテン語の cantare habebam 型迂言形の段階ではむしろ、≪義務≫や≪必然性≫をあらわしていた（cf. 渡邊 2019 a）。単独で必然性をあらわしていた cantare habebam 型迂言形が、やがて仮定と帰結の関係の必然性を標示するようになったのである。このことと、現代コルシカ語の迂言的未来形とのあいだには、条件文中での用法への移行のなかでの意味変化において、類似性がみとめられる。

[10] (11) は未来諸時制の対照研究である渡邊 (近刊) でも引いた例であるため、この例に関する論述は渡邊 (近刊) と一部重複することをことわっておきたい。

科 Miss Lydia li lampede un sguardu pienu di dignità, è, indirizzendu si à u marinaru, li dumandede quand'ella **avia da ghjunghje** [半過×迂未] in portu a guletta. (対訳書 p.45)

伊 Miss Lydia gli lanciò uno sguardo pieno di dignità, e indirizzandosi al mozzo, chiese quando la goletta **sarebbe giunta** [条過] sin porto. (伊訳書 p.38)

リディア嬢は威厳にみちたまなざしを投げて、水夫に話しかけ、船がいつ港につくかとたずねた。

この例はもっぱら時制的である。フランス語版の条件法現在形は過去からみた未来をあらわす、いわゆる時制的用法である。コルシカ語版においては、助動詞の半過去形が過去の視点をあらわし、迂言的未来形がそこから展望された相対的未来時をあらわしている。

3.2.4. つぎに、フランス語の条件法現在形にコルシカ語の直説法半過去形が対応する事例。

(14) 仏 De la part d'un autre, je ne **passerais** [条現] pas l'espièglerie. (対訳書 p.176)

科 S'eddu era statu un antru cà voi, u scherzu ùn lu **lasciavu** [半過] passà mì ! (対訳書 p.177)

伊 […] ad un altro non **avrei menata** [条過] buona la funebria. (伊訳書 p.107)

ほかの人だったら、こんないたずらは許さないところです。

(14) のコルシカ語版では、半過去のかわりに条件法現在形第 1 形で lasciaria (対訳書とおなじ方言的ヴァリアントでいうなら lasciariu) を用いることも可能である。ここで直説法半過去形を用いるのは、条件法現在形がその基本的構造において可能世界を眺望する視点を位置づけている過去時 (cf. 渡邊 2014, pp.69-70) のみを示すことにより、仮定からのある種の延長に帰結をも位置づけようとしているものと思われる。この用法は、フランス語における「間一髪の半過去形」(imparfait d'imminence contrecarrée) に類する用法である [11] が、条件法現在形と対応するという点で、本来の「間一髪の半過去形」とはことなる (4.2.1 節参照)。また、条件法現在形と直説法半過去形の対応は両方向でみられる (3.3.2 節参照)。

3.2.5. 最後に、フランス語のみで条件法現在形を用いている文が集中的に出てくる個所がある、非常に目立った例を見ておこう。

(15) 仏 Depuis que le préfet a suspendu le maire, tous les hommes d'ici sont pour nous. Nous **pourrions** [条現] les hacher. Il **serait** [条現] facile d'entamer l'affaire. Si vous le vouliez, j'**irais** [条現] à la fontaine, je me **moquerais** [条現] de leurs femmes ; ils **sortiraient** [条現] … Peut-être… car ils sont si lâches ! peut-être **tireraient** [条現] -ils sur moi par leurs archères ; ils me **manqueraient** [条現] . (対訳書 p.244)

[11] 間一髪の半過去形については渡邊 (2014) の第 3 章を参照。

科 Dapoi chì u prifettu hà suspesu u merri, tutti l'omi di quì ne tenenu par noi. I **pudariamu** [条現 1] scompie mì ! **Saria** [条現 1] faciule d'attaccà lita. S'è vo vulete, **vacu** [直現] à a funtana è mi **rirgu** [直現] di e so donne ; elli **sortenu**... [直現] forse... chì vigliacchi sò ! Forse **anu da tirà** [迂未] nant'à mè da l'archere ; m'**anu da mancà** [迂未] . (対訳書 p.245)

伊 Dacché il prefetto ha sospeso il sindaco, tutti gli uomini del paese sono per noi. Noi li **possiamo** [直現] fare a pezzi i Barricini. Non **sarà** [単未] difficile trovare un pretesto. Se voi volete, io **andrò** [単未] alla fontana, mi **burlerò** [単未] delle loro donne. Essi **sortiranno** [単未]. Forse… perché sono così vili ! Forse **tireranno** [単未] contro me dalle loro feritoie : non mi **coglieranno** [単未].

(伊訳書 p.143)

知事が村長の権限を停止してからは、この村のひとびとはみんなわたしたちの味方です。連中を粉々にしてやることができます。理由をつけることは簡単です。もしおのぞみなら、わたしは泉のところまで行って、あちら側の女たちを笑ってやります。そうしたら、彼らは出てくるでしょう。たぶん来るとは思いますが、彼らは卑怯者だからそこはわかりません。弓矢でねらってくるかもしれません。でも外れるでしょう。

このくだりはコロンバのせりふで、バリヂーニ派に対する復讐の考えをのべている。フランス語では条件法現在形を 7 つ連ねて用いている。条件法現在形の第 3、第 4 の生起は si 節による仮定に対応する帰結であるという点で一見異質のようではあるが、それでもなお、全体としてみればコロンバの思いえがく一連の流れになっている。Togeby (1985, vol.2, p.390) の用語でいえば、「夢想の条件法」(conditionnel du rêve) の一例である。フランス語では、(16) に見られるように、条件法をくり返し用いることにより、連綿たる≪夢想≫を言いあらわすことができる。

(16) Je t'aime tellement que je **pourrais** [条現] vivre avec toi, avoir des enfants de toi. Nous **construirions** [条現] une maison, nous nous **aurions** [条現] un garçon et une fille à qui j'**apprendrais** [条現] à lire et à écrire. Nous nous **querellerions** [条現] à propos de leur éducation. (Togeby 1985, vol.2, p.390)

あなたのことがとても好きなので、あなたといっしょに住んで、あなたの子どもがほしいわ。わたしたちは家を建てて、男の子と女の子をもうけて、読み書きを教えるの。わたしたちはときどき子どもたちの教育について言いあいをするの。

それに対して、(15) のコルシカ語版では、フランス語版と同様に条件法現在形を用いているのは、はじめの 2 つの生起だけである。3 つめから 5 つめの生起は直説法現在形、そして最後の 2 つは迂言的未来形になっている。つまり、コルシカ語ではフランス語ほど「夢想の条件法」が堅固に慣習化されていないのである。第 3 の生起からは、s'è [12] からはじまる仮定節に対応する帰結を直説法現在形で言いあらわしていることもあり、文の流れが変わって、いったん時制の連鎖

[12] コルシカ語では仮定節をみちびく接続詞は se であるが、(等位接続詞に由来する) è を添えて s'è とする場合がある。註 7 でふれた s'e とはことなる。

がリセットされる。その際に出現した直説法現在形を足がかりとして、最後の 2 つの生起に見られる迂言的未来形につながってゆくのである。

3.3. コルシカ語のみで条件法現在形を用いる場合

つぎに、コルシカ語のみで条件法現在形を用いる場合の典型的事例を検討してゆく。なお、以下で問題にするのは条件法現在形第 1 形である。第 2 形については 3.2.4 節を参照されたい。

3.3.1. まず、コルシカ語の条件法現在形第 1 形にフランス語の直説法現在形が対応する事例。

(17) 仏 Il **vaut** [直現] mieux que ce soit demain. (対訳書 p.204)

科 Megliu **saria** [条現 1] ad aspittà dumane. (対訳書 p.205)

伊 **Sarà** [単未] meglio che aspetti a domani. (伊訳書 p.122)

明日にしたほうがよいでしょう。

コルシカ語版の条件法現在形はいわゆる語調緩和用法である。フランス語版はそれにくらべると断定的にみえるが、動詞 valoir、そして補足節中の接続法 (ce soit) が発話の主観的側面を担っている。それに対して、コルシカ語版では、aspittà が不定法であるため、主節に主観的側面をつけくわえたと考えることができる。

3.3.2. つぎに、コルシカ語の条件法現在形第 1 形にフランス語の直説法半過去形が対応する事例。

(18) 仏 Ah ! si le préfet ne s'était pas mis devant Vincentello, il y en **avait** [半過] un de moins. (対訳書 p.246)

科 Piccatu ch'ellu si fussi messu davanti à Vincintellu u prifettu, chì tandu ci ne **saria** [条現 1] unu di menu. (対訳書 p.247)

伊 Ah ! Se il prefetto non si fosse messo davanti a Vincentello, ne **avremmo** [条現] già uno di meno ! (伊訳書 p.143)

ああ！ 知事がヴィンチンテッルのまえに来なければ、敵をひとり減らせていたでしょうに！

(18) のフランス語版では、「間一髪の半過去形」に類する用法が用いられている。これに対して、コルシカ語では、反実仮想の帰結をあらわす条件法現在形が用いられている。ただ、3.2.4 節でみたように、逆方向の対応関係もあるので、このような場合には形式の選択は比較的自由であると思われる。

3.3.3. こんどは、コルシカ語の条件法現在形第 1 形にフランス語の直説法単純未来形が対応する事例。

(19) 仏 Si mademoiselle l'accepte, elle nous **fera** [単未] bien plaisir. (対訳書 p.116)

科 S'ella l'accetta a signurina, ci **faria** [条現 1] gran piacè. (対訳書 p.117)

伊 Se madamigella accetta, ci **farà** [単未] un distinto onore. (伊訳書 p.76)

もしお嬢さまが受けいれてくださるなら、たいへんうれしく存じます。

(19) のフランス語版では、＜Si＋ 直説法現在形, 直説法単純未来形＞という文型が用いられている。すでに、3.2.2 節で、＜Si＋ 直説法半過去形, 条件法現在形＞に関してふれるところがあったフランス語での条件文の文型の規範的な固定の堅固さはここにもあらわれており、仮定節で用いた形式に応じて、帰結節できまった形式を用いる傾向が強い。これに対して、コルシカ語では、(19) にもみられるように、条件文の文型が比較的自由であることがわかる。

もうひとつ、コルシカ語の条件法現在形第 1 形にフランス語の直説法単純未来形が対応する例をみよう。

(20) 仏 Vous êtes galant, monsieur le sergent, dit Colomba, mais vous ne **ferez** [単未] pas mal de faire attention à vos paroles. (対訳書 p.324)

科 Sete po galantomu, o sgiò sargente, disse Culomba, ma megliu **saria** [条現 1] à fà casu à ciò ch'è vo dite. (対訳書 p.325)

伊 Voi siete galante, signor sergente — riprese Colomba — ma non **farete** [単未] male di badare alle vostre parole. (伊訳書 p.183)

お優しいのですね、軍曹さん。でも、ことばに気をつけたほうがいいですよ。

フランス語の単純未来形は、ロマンス諸語のなかでは全般的にモダールな用法が衰退しているが、渡邊・小川 (2018)、渡邊 (近刊) でものべたように、語調緩和用法にかぎっては、フランス語でも単純未来形がさかんに用いられる。(20) もその一例として考えることができる。

4. 条件法過去形を中心とする対照分析

本節ではフランス語またはコルシカ語で条件法過去が用いられている事例について、代表的な用法の例文を観察するとともに、分析を行なう。なお、本稿の調査範囲に生起したコルシカ語の条件法過去形はいずれも第 1 形 (averia cantatu, averii cantatu...) であり、第 2 形 (averebbi cantatu, averesti cantatu...) は生起しなかった。

4.1. 両言語とも条件法過去形を用いる場合

本節では両言語で条件法過去形が用いられている場合を実例に即して考察してゆく。条件法現在形の場合とちがって、時制的用法と確定できる例、語調緩和用法と確定できる例が調査範囲には見あたらなかった。ただしもちろん、調査範囲にはそれらの用法と確定できる例が存在しなかっただけであり、構造的に欠如しているわけではない。

4.1.1. まず、条件文の例を見よう。

(21) 仏 Si vous aviez demeuré ailleurs, monsieur le préfet, dit-elle, mon frère **serait allé** [条過] hier vous présenter ses respects. (対訳書 p.218)

科 S'è vo fussite statu allughjatu in altrò o sgiò prifettu, disse, me fratellu **saria andatu** [条過 1] arimane à prisintà vi i so rispetti. (対訳書 p.219)

伊 Si voi avete dimorato altrove — signor prefetto — mio fratello **sarebbe andato** [条過] sin da ieri a presentarvi i suoi rispetti. (伊訳書 p.130)

もし知事がほかのところに宿泊なさっているなら、と彼女は言った、わたしの兄が昨日からご挨拶にうかがっていたのですが。

過去の事実に反する仮定に対応する帰結をあらわすには、基本的に、フランス語・コルシカ語は一致して条件法過去形を用いている。

4.1.2. つぎに、条件文ではないが非現実性をあらわす例。

(22) 仏 Je vous avais désobéi, Miss Nevil… et je n'**aurais** pas **osé** [条過] vous voir en ce moment. (対訳書 p.316)

科 Vi avia disubbiditu, o Miss Nevil... è ùn **avaria avutu** [条過 1] a faccia di vede vi tandu. (対訳書 p.317)

伊 Io vi ho disobbedito, Miss Navil, e non **avrei osato** [条過] comparirvi dinanzi in questo momento. (伊訳書 p.178)

あなたのご命令にそむいたのです、ネヴィルさま。なのでわたしは、ここのところ、あなたにお目にかかるなどという勇気が出ませんでした。

この例では、「あえてあなたにお目にかかる」という過去の仮想的な事態にあまりにも現実味がないということを言いあらわそうとして、条件法過去形が用いられている。そのような現実味のない事態は、話者がみずから断定を引きうけたくないために、両言語において条件法によって示されるのである。

4.1.3. 最後に、やや分類の困難な例をみておこう。

(23) 仏 Colomba, courbée sur son frère, lui cachait complètement sa compagne, que l'obscurité, d'ailleurs, lui **aurait** difficilement **permis** [条過] de reconnaître. (対訳書 p.312)

科 Culomba, aghjumpata si versu u fratellu, li piattava in tuttu a so cumpagna, chì u bughju d'altronde ùn li **avaria** tantu **parmessu** [条過 1] di cunnosce la. (対訳書 p.313)

伊 Colomba piegata sul fratello, gli nascondeva completamente la sua compagna, che l'oscurità d'altronde non gli **avrebbe lasciato** [条過] riconoscere. (伊訳書 p.176)
コロンバは兄の上にかがみこんで、つれの女性 [リディア嬢] の姿を兄の目から完全に隠していた。といっても、暗闇のせいで、リディア嬢を認めることはむずかしかっただろう。

この例において、もっともありうる解釈は、実際にはコロンバがリディア嬢のすがたを隠していたが、かりに隠していなかったとしても暗くて見えなかっただろう、という過去の事実に反する仮定に対応する帰結をあらわすというものである。しかし一方で、主節の動詞 cachait / piattava「隠していた」に対応する過去時からみた前未来をあらわす時制的用法であるという解釈も排除はできない。かりに時制的用法であるとしても、条件法現在形の場合と平行的に、フランス語・コルシカ語ともに条件法過去形を用いるということがわかる。

4.2. フランス語のみで条件法過去形を用いる場合

つぎに、フランス語のみで条件法過去形を用いる場合の典型的事例を検討してゆこう。

4.2.1. まず、フランス語の条件法過去形にコルシカ語の直説法半過去形が対応する場合。

(24) 仏 Si je n'eusse craint de vous rencontrer, Miss Nevil, j'**aurais essayé** [条過] de retourner à Pietranera, et je **me serais constitué** [条過] prisonnier. (対訳書 p.316)
科 S'ella ùn era stata a tema di scuntrà vi, o Miss Nevil, mi ne **vultava** [半過] in Petranera è **mi mittia** [半過] in manu à a ghjustizia. (対訳書 p.317)
伊 Se non avessi avuto timore d'incontrarvi, miss Nevil, **mi sarei avventurato** [条過] di ritornare a Pietranera e **mi sarei costituito** [条過] prigioniero. (伊訳書 p.178)
あなたに会うのがこわくなかったら、わたしはピエトラネーラにもどろうとしたでしょう、そして、囚われの身になっていたでしょう。

この例のコルシカ語版では、「間一髪の半過去形」が用いられている。直説法半過去形が「未完了の過去」をあらわすことを利用して、過去に実現にはいたらなかった事態を示しているのである。ただ、3.2.4 節、3.3.2 節のケースとちがうところは、比較対象が条件法現在形ではなく条件法過去形であるという点である。本来の意味での「間一髪の半過去形」は、いま扱っている例のような、条件法過去形に対応する半過去形である。渡邊 (2014, pp.44-46) でのべたように、間一髪の半過去形は、(中途までとはいえ) 動詞事行が進展しつつあったことを過去に位置づけているのであり、その結果、「結果的には避けられた事態ではあるが、途中までは進行していた」という切迫性の意味効果が得られる。このため、直接比較可能なのは、過去に起きなかった事態に言及する条件法過去形のほうである。

一方、3.2.4 節、3.3.2 節でふれた、条件法現在形と対応するケースは、3.2.4 節でものべたよう

に、((24) のような過去時の反実仮想ではなく) 現在時の反実仮想に関して、それを眺望する視点である過去時を半過去形によって指示しているものであり、一応「間一髪の半過去形に類する用法」とは呼んだものの、事態を直接過去時に位置づけているわけではないので、「間一髪」と呼んだ切迫性の意味効果は劣ることになる [13]。

4.2.2. つぎに、フランス語の条件法過去形にコルシカ語の直説法大過去形が対応する場合。

(25) 仏 En outre, on constata que le maire, après avoir reçu le portefeuille de la femme Pietri, n'**aurait pu** [条過] lire à cause de l'obscurité ; […] (対訳書 p.96)

科 È po fecenu custatu chì u merri, dopu ricivutu u fugliale da a donna Pietri, ùn **avia** micca **pussutu** [大過] leghje par via di a bughjura ; […] (対訳書 p.97)

伊 Inoltre constava che il sindaco, dacché aveva ricevuto il portafogli dalla donna Pietri, non vi **poté** [単過] leggere a motivo dell'oscurità. (伊訳書 p.66)

さらに、村長がピエトリの妻から紙入れを受け取ったあと、読もうとしても、暗闇のせいで読めなかっただろう、ということも確認された。

この例のフランス語版では、「かりに村長が紙入れの中身を読もうとしたとしても」という隠れた仮定のもとに帰結を示そうとして条件過去形が用いられている。一方、コルシカ語版では直説法大過去が用いられている。法動詞 pudè (cf. フランス語 pouvoir) が用いられていることから、可能性のモダリティは標示されているものの、それだけではコルシカ語版で (直説法半過去形ではなく) 直説法大過去形が用いられていることは説明できない。ここでは、コルシカ語版もフランス語版と同様の仮定を前提としつつ、条件法過去形が視点をおく大過去時をそのまま指示する直説法大過去形を用いていると考えたい。つまり、3.2.1 節でみた、フランス語の条件法現在形とコルシカ語の直説法半過去形との対応関係に、助動詞であらわされる完了が加わったものである。

4.2.3. つぎに、フランス語の条件法過去形にコルシカ語の直説法現在形が対応する場合。

(26) 仏 Ici Madeleine commença à sangloter tout haut et deux ou trois hommes qui, dans l'occasion, **auraient tiré** [条過] sur des chrétiens avec autant de sang-froid que sur des perdrix, se mirent à essuyer de grosses larmes sur leurs joues basanées. (対訳書 p.186)

科 Tandu Maddalena principiede à singhjuzzà è dui o trè omi, di quelli chì s'ella li casca vi **tiranu** [直現] nantu à cristiani quant'è ch'elli sianu parnice, asciuvonu i lacrimoni chì li spisciulavanu nantu à

[13] 本稿は理論的であることをめざしていないので、ここでは詳述しないが、これらの相違は、渡邊 (2021) でのべた、「叙事的時制」と「叙想的時制」の相違に帰する。「間一髪の半過去形」は事態（の中途までの展開）を直接時間軸上に位置づけるという意味で「叙事的」であるのに対し、条件法現在形に対応する直説法半過去形は、視点を時間軸上に位置づけるという意味で「叙想的」である。

i so maschetti mori. (対訳書 p.187)

伊 Qui Maddalena cominciò a singhiozzare, e due o tre uomini che nell'occasione **avrebbero fatto** [条過] su dei cristiani con tanto sangue freddo come su delle pernici, si misero ad asciugarsi le grosse lagrime che spuntavano loro dagli occhi. (伊訳書 p.112)

ここでマッダレーナは大声で泣きはじめ、それから 2、3 人の男も、しかるべき場合には、鷓鴣 (しゃこ) を撃つのとおなじくらいの冷静さで人間を撃つかもしれないような男たちであるにもかかわらず、日焼けした頬にながれる大粒の涙をぬぐいだした。

この例のフランス語版では、「dans l'occasion で仮定された、過去にあったかもしれない状況下では」という条件に限定されて条件法過去形が用いられている。それに対しコルシカ語版では、s'ella li **casca** と、＜se＋直説法現在形＞で仮定が示されており、帰結節でも直説法現在形がもちいられている。この対比は、3.2.2 節、3.3.3 節でふれた、フランス語では条件文の文型が堅固に固定しているのにくらべて、コルシカ語では比較的自由である、という現象の一環をなしていると思われる。

4.2.4. 最後に、フランス語の条件法過去形に、コルシカ語の助動詞が直説法半過去形におかれた迂言的未来形が対応する場合。

(27) 仏 Allons-nous en, mon père, nous n'**aurions** jamais **dû** [条過] venir ici ! (対訳書 p.222)

科 Aiò o Bà, andemu, ùn **aviamu** mai **da esse vinuti** [半過×迂未] quì ! (対訳書 p.223)

伊 Andiamocene, mio padre ! Noi non **avremmo dovuto** [条過] giammai venire qui ! (伊訳書 p.132)

行きましょう、お父さん、わたしたちは決してここに来るべきではなかったのです！

この例のフランス語版では、法動詞 devoir が条件法過去形におかれている。このような場合、たとえば « On **aurait dû** réserver nos places ! » (「座席を予約するべきだったなあ！」) のように、条件法過去形は慣習的に非難や後悔をあらわす。コルシカ語の条件法過去形にも同様の慣用はあるが、このようなとき、コルシカ語では直説法大過去形も用いられる (渡邊 2017, p.67)。しかしここでは、さらにことなる方法で翻訳がなされている。コルシカ語の迂言的未来形は、ここでは未来時指示の意味をもっているのではなく、迂言形＜avè da + 不定法＞の原義ともいうべき≪義務≫の意味をあらわしている。つまり、フランス語の devoir に対応する役割を果たしているのである。そして、迂言形の助動詞 avè が直説法半過去形におかれているのは、≪義務≫が過去時に位置づけられることをあらわしている。

4.3. コルシカ語のみで条件法過去形を用いる場合

最後に、コルシカ語のみで条件法過去形を用いる場合の典型的事例を検討してゆこう。

4.3.1. まず、コルシカ語の条件法過去形第 1 形にフランス語の条件法現在形が対応する場合。

(28) 仏 Elle a juré la mort des Barricini ; et… Miss Nevil, voyez quelle confiance j'ai en vous… peut-être ne **seraient** [条現] -ils plus de ce monde, si, par un de ces préjugés qu'excuse son éducation sauvage, elle ne se persuadait que l'exécution de la vengeance m'appartient en ma qualité de chef de famille, et que mon honneur y est engagé. (対訳書 p.106)

科 Hà ghjuratu a morte di i Barricini ; è... a videte o Miss Nevil quant'e mi fidu di voi... forse chì Falcina i **si saria** dighjà **pigliati** [条過 1], s'è me surella ùn fussi parsuasa, causa di un cuncettu anticognu ch'omu pò scusà par via di a so educazione salvatica, ch'ellu mi tuccassi à mè à fà a vindetta, da capu di famiglia ch'e sò, è ch'ellu ci fussi impignatu u me anore. (対訳書 p.107)

伊 Ella ha giurato la morte dei Barricini e, Miss Nevil, vedete quale confidenza io metta in voi, essi non **sarebbero** [条現] forse più di questo mondo, se per uno di quei pregiudizi che trovano scusa nella sua educazione selvaggia, non ritenesse che l'esecuzione della vendetta mi appartiene nella mia qualità di capo della famiglia, e che il mio onore vi è impegnato. (伊訳書 pp.70-71)

コロンバはバリヂーニ家の殲滅を誓っているのです。ネヴィルさま、あなたを信頼しているので申し上げます。もしコロンバが、彼女のうけた野蛮な教育がもたらす偏見から、復讐の実行が家長であるわたしの権限に属しており、わたしの名誉が問われていると確信していなければ、ひょっとすると、バリヂーニ家のひとたちはもうこの世にはいなくなっていたかもしれません。

この例は、分類上はフランス語の条件法現在形にコルシカ語の条件法過去形第 1 形が対応しているものの、実質的にはほとんど違いはないと思われる。フランス語 n'être plus de ce monde「もはやこの世にいない」が指し示している状態は、コルシカ語 piglià si「撃ちとられる」(受動的代名動詞) の結果状態に対応しており、コルシカ語では条件法過去形をかたちづくる完了の助動詞によって結果状態であることをあらわしているからである。翻訳の柔軟性によって、用いる動詞がことなっているものである。

4.3.2. つぎに、コルシカ語の条件法過去形第 1 形にフランス語の直説法半過去形が対応する場合。

(29) 仏 Il y **avait** [半過] bien encore quelques observations à faire sur l'orthographe un peu capricieuse de mademoiselle Colomba, qui, plus d'une fois, fit sourire miss Nevil, tandis que la vanité fraternelle d'Orso était au supplice. (対訳書 p.78)

科 **Si saria pussutu** [条過 1] fà calchì rimarca à puntu di l'urtugraffia à quella volta di a signurina Culomba, chì, più d'una volta, fece surride à Miss Nevil, mentre chì a vanità fraterna ballava nantu à a ziglia calda. (対訳書 p.79)

伊 Vi **sarebbe stato** [条過] ancora qualche osservazione a fare sull'ortografia un po' capricciosa di madamigella Colomba, che più di una volta fece sorridere miss Nevil al punto da mettere a supplizio

la fraterna vanità di Orso. (伊訳書 p.55)

コロンバ嬢のいささか気まぐれな正書法については、さらにいくつかの批判があったかもしれない。しかしそれは何度もコロンバを微笑させ、その一方で、オルスの兄としての誇りは苦悶していた。

この例のフランス語版は、間一髪の半過去形と認めるべきかいなか、微妙な例であるが、添えられた副詞 bien や encore のはたらきによって、「実際に批判がなされた」という解釈ではなく、「潜在的に批判が存在した」という解釈も十分可能である。コルシカ語訳はその解釈をとっている。もしそうであるなら、4.2.1 節でふれた、間一髪の半過去形と条件法過去形の互換性のひとつの例であるといえる。

4.3.3. 最後に、コルシカ語の条件法過去形第 1 形にフランス語の接続法大過去形が対応する場合。特異な事例なのであとにまわしたが、コルシカ語の条件法過去形第 1 形にフランス語のことなる形式が対応する事例のなかでは最多 (7 例) であった。

(30) 仏 En voyant ses yeux étincelants, son teint animé, cette alternative de préoccupation et de sang-froid, il **eût été** [接大過] difficile de dire si elle était plus touchée de la blessure de son frère qu'enchantée de la mort de ses ennemis. (対訳書 p.286)

科 À chì vidia i so ochji chì scausgiulavanu, a so crala chì cambiava culore, issu passa è vene trà pinseri è sangue fretu, **avaria avutu** [条過 1] di i guai à dì s'ella era di più impinsirita da a firita di u fratellu o incantata da a morte di i numichi. (対訳書 p.287)

伊 Nello scorgere i suoi occhi scintillanti, il suo colore animato, qull'alternativa di preoccupazione d si sangue freddo, **sarebbe stato** [条過] difficile dire se essa fosse più dolente della derita toccata al fratello o più felice della morte dei suoi nemici. (伊訳書 p.164)

彼女のかがやく目や、いきいきとした顔色、かわるがわる出てくる心配と冷静さを見るなら、彼女は兄の負傷をいっそう心配しているのか、それとも敵たちの死をいっそう歓迎しているのかを言うことはむずかしかっただろう。

この例のフランス語版では、条件法過去形の代用としての接続法大過去形が用いられており、このことはフランス語の特徴であるといえる (コルシカ語でいう「第 1 形 / 第 2 形」とまぎらわしいので、フランス語におけるこの代用を「条件法過去形第 2 形」とは呼ばないことにする)。これに対しコルシカ語では、接続法大過去形は、つぎの (31) にみるように、過去の事実に反する仮定節のみにあらわれるものであって、帰結節にはあらわれない。(31) は (21) のコルシカ語版の再掲であるが、接続法大過去があらわれているのは s'è ではじまる仮定節のなかである。

(31) [=(21) 科] S'è vo **fussite statu allughjatu** [接大過] in altrò o sgiò prifettu, disse, me fratellu saria

andatu arimane à prisintà vi i so rispetti. (対訳書 p.219)

もし知事がほかのところに宿泊なさっているなら、と彼女は言った、わたしの兄が昨日からご挨拶にうかがっていたのですが。

5. おわりに

本稿では、コーパス調査にもとづいて、フランス語とコルシカ語の条件法、ならびにそれらに翻訳上対応している叙法・時制について対照してきた。

全体をふりかえってまとめると、フランス語のほうがコルシカ語より条件法を多く使っていたといえる。そのひとつの理由として、フランス語の条件法は、≪他者の言説≫や、連綿たる≪夢想≫を標示することができ、しかもその際、くり返して用いることができる点が目立っていた。

また、フランス語は＜Si + 直説法半過去形, 条件法現在形＞のような条件文の文型が堅固に規範化している一方、コルシカ語ではこの点が比較的自由であることがあげられる。条件文の帰結節に、直説法半過去形や直説法大過去形を用いる例はコルシカ語のほうが多かった。

さらには、フランス語の条件法からの対訳に、コルシカ語では、迂言的未来形を用いたり、迂言的未来形の助動詞を直説法半過去形や条件法においた構文もあるなど、フランス語より多様な形式が調査範囲に見られた。

本稿はまず、記述的であることをめざしてきた。動詞の叙法・時制体系をいっそう理論的に解明することに関しては、フランス語についてはすでに渡邊 (2004) (2014) (2018) (2019 a) (2021) などで展開してきたが、コルシカ語については未着手である。これは今後の課題としたい。

参考文献

Abouda, Lofti et Marie Skrovec (2017) : « Du rapport micro-diachronique futur simple / future périphrastique en français moderne », *Corela*, 21, pp.1-25.

Casta, Santa (2003) : *La syntaxe du corse*, CRDP di Corsica.

Comrie, Bernard (1974) : *Aspect*, Cambridge University Press.

Confais, Jean-Paul (1990) : *Temps, mode, aspect*, Presses Universitaires du Mirail.

Diller, Anne-Marie (1977) : « Le conditionnel, marqueur de dérivaion illocutoire », *Semantikos* 2, 1, pp.1-17.

Fălăuş Anamaria et Brenda Laca (2014) : « Les formes de l'incertitude. Le futur de conjecture en espagnol et le présomptif futur en roumain », *Revue de linguistique romane*, 78, pp.313-366.

Fauconnier, Gilles (1984) : *Espaces mentaux*, Minuit.

Gaggioli, Ghjaseppiu (2012) : *La langue corse en 23 lettres*, Albiana.

Novakova, Iva (2001) : *Sémantique du futur. Étude comparée français-bulgare*, L'Harmattan.

Popescu, Mihaela (2015) : « Le « futur épistémique inférentiel » dans les langues romanes. Une approche contrastive », *Revue de Sémantique et Pragmatique*, 38, pp. 59-75.

Squartini, Mario (2004) : « La relazione semantica tra futuro e condizionale nelle lingue romanze », *Revue Romane*, 39, 1, pp.68-96.

Squartini, Mario (2008) : « Lexical vs. Grammatical evidentiality in French and Italian », *Journal of Linguistics*, 46, 5, pp.917-947.

Togeby, Knud (1985) : *Grammaire française*, 5 vols, Akademisk Forlag.

Watanabe, Jun-ya (2002) : « Le conditionnel du « discours d'autrui » », *Études de langue et littérature françaises*, 78, pp.216-230.

渡邊淳也 (2004) :『フランス語における証拠性の意味論』早美出版社.

渡邊淳也 (2014) :『フランス語の時制とモダリティ』早美出版社.

渡邊淳也 (2017 a) :『コルシカ語基本文法』早美出版社.

渡邊淳也 (2017 b) :「フランス語および西ロマンス諸語における「行く」型移動動詞の文法化」天野みどり・早瀬尚子 (編)『構文の意味と拡がり』くろしお出版, pp.223-245.

渡邊淳也 (2018) :『叙法の謎を解く』白水社.

渡邊淳也 (2019 a) : 「フランス語の単純未来形と条件法—叙法的対立とその源泉—」『言語・情報・テクスト』東京大学, 26, pp.63-78.

渡邊淳也 (2019 b) :「フランス語の条件法現在形・条件法過去形とロマンス諸語における対応形式の対照研究」『筑波大学フランス語・フランス文学論集』34, pp.57-90.

渡邊淳也 (2021) :「フランス語半過去形と叙想的時制・叙想的アスペクト」益岡隆志監修『 [研究プロジェクト] 時間と言語』ひつじ書房, pp.261-289.

渡邊淳也 (近刊) :「フランス語とコルシカ語における未来諸時制の対照研究」2023 年刊行予定.

渡邊淳也・小川紋奈 (2017) :「フランス語の単純未来形・前未来形とロマンス諸語における対応形式の対照研究」渡邊淳也・和田尚明編『諸言語における TAME の発現と認知モード』筑波大学 TAME 研究会, pp.59-82.

例文出典

Prosper Mérimée : *Colomba*, versione bislingua francese-corsa, tradutta da Ghjuvan Battistu Paoli, CANOPÉ [＝Réseau de création et d'accompagnement pédagogiques] 2016.

Prosper Mérimée : *Colomba*, versione italiana, tradotta da Ottone Bacaredda, Head & Line 2014.

(わたなべ　じゅんや / 東京大学)